

# 令和7年度 南アルプス市立櫛形中学校 自己評価書

令和7年12月18日

|  |      |       |          |
|--|------|-------|----------|
| 校長   | 笹本忠彦 | 記入責任者 | 教頭 内藤 共哉 |
| <b>校訓</b><br>高登彼岸<br>～高い理想の境地をめざし、その目的地に<br>登りつくよう懸命の努力を惜しむな～<br><b>学校教育目標</b><br>○確かな学力 ○豊かな心 ○健やかな体  |      |       |          |
| <b>I 評価方法</b>  |      |       |          |
| <p>本校は、令和4年度より小中一貫校としてスタートした。学校評価については昨年度から、小中で回数及び実施時期の足並みを揃えることとし、年1回2学期末に実施した。</p> <p>自己評価の資料として12月、教職員・生徒・保護者の3者に対して、アンケート形式によりWEB上で回答を得た。質問に対する回答選択肢は4段階になっている。</p> <p>A：とても、よく～している<br/>B：だいたい～している<br/>C：あまり～していない<br/>D：～していない</p> <p>A、Bは肯定的傾向のプラス評価であり、C、Dは否定的傾向のマイナス評価である。A、Bの区別とC、Dの区別は、回答者の回答時の状況等により変わることもあるため、厳密に区別するのではなく、プラス傾向、マイナス傾向とし、全体の傾向を評価した。</p> <p>具体的には、A・B・C・Dの選択肢を点数化した。A=4、B=3、C=2、D=1として集計し、回答者数で割って平均点数を求めた。平均点数は次のような意味を持つ。</p> <p>○全体にプラス評価（A・B）が多ければ、平均点は2.5点以上になり4に近づいていく。<br/>○全体にマイナス評価（C・D）が多ければ、平均点は2.5未満になり1に近づいていく。<br/>なお、保護者のアンケート回答の選択肢として、E：わからない という選択肢があるが、これは点数には含めていない。</p> |      |       |          |

## Ⅱ 全体評価

○教職員の自己評価、生徒アンケート、保護者アンケートのそれぞれの集計結果を見ると、いずれも昨年度と同等な結果となった。

- ・教職員自己評価結果では、23項目中すべての質問項目において評価の平均が3.0を上回った。【R6年度は21項目】そのうち、昨年度の評価の平均を上回った項目が、14項目に及んだ。また、13項目については、肯定的評価が100%であった。これは、年度初めに全職員で共通理解をし、意識して教育活動に取り組んできた成果と言える。

特に、

⑫「児童理解のために、日頃から様々な方法でコミュニケーションを図っているか」

⑬「諸問題（いじめ・不登校等）の早期発見・早期対応に努めているか」

の項目では、A回答が昨年度より約20%増加し、70%を超える結果となった。このことから、教職員が、積極的に生徒とのコミュニケーションをとり、生徒理解や日常の学校生活について把握するように意識していることはもちろん、危機管理意識を高くもち、諸問題に対して連携し取り組んでいる様子が数値として表れている。

反対に、肯定的評価は100%でありながら、昨年度の評価の平均が昨年度より低下がみられた項目が3項目あった。中でも、以下の2項目では、A回答が20%程度の減となった。

⑤「校務分掌で任された業務に積極的に取り組んでいるか」

の項目では、主となる教員が業務を抱えてしまっている現状や、声かけや連携不足が主な要因と考えられる。多忙化改善の観点からも、業務の精選・分担を担当ごとに検討していく必要性を感じている。また、

⑧「教材・教具（ICT機器を含む）を効果的に活用する授業を行っているか」

の項目では、昨年度に比べ、一人一台端末の使用頻度は上がっているように感じてはいるものの、「効果的か」という観点で、教員のより一層の教材研究やICT活用スキルの向上が求められる。

- ・生徒アンケートでは、昨年度同様に、21の質問項目中、平均点数化できる19項目のうち、17項目で評価の平均が3.0を上回る結果であった。特に、

⑨「学校の授業がわかる」の肯定的回答は、84.1%

⑩「自分の考えをもって他の人の話を聞いている」の肯定的回答は、92.5%と高い数値を示している。これは、一昨年度から市指定「学びの質を高める授業づくり」推進事業を受けて取り組んでいる授業改善の成果が少しずつ表れてきているものと考えられる。また、

④「困ったことがあったら相談できる先生がいる」の項目の肯定的回答が82.0%であったことは、教職員自己評価結果と同様に、生徒と教職員の関係性が良好で、相談しやすい雰囲気が出てきているのではないかと考察できる。

- ・保護者アンケートでは、16の質問項目中、平均点数化できる14項目のうち、13項目で評価の平均が2.5を上回る結果であった。そのうち、評価の平均が3.0を上回る項目数は4項目となり、昨年度より1項目減る結果となったが、肯定的な評価の割合は、高い数値を示すものであった。

総括して、櫛形中学校では学校教育目標の実現に向け、一人一人の教職員が、保護者の理解と協力の下、職務に真摯に向かいあい遂行してきたことで、学校教育活動全般において生徒に適切な指導が行われ、結果、生徒と保護者に肯定的に評価されていると考えられる。従って、本校の学校評価に係る総合的な評価は、PDCAサイクルが活かされた結果、良好な水準にあるといえる。

そのような中でも昨年度と比較したり、一つ一つの結果に目を向けてみたりすると、努力を要する項目がある。教職員、生徒、保護者のそれぞれのアンケートについて、次項で考察し課題を明らかにしていきたい。

### Ⅲ アンケートごとの評価

#### 教職員の自己評価アンケートについて

教職員の回答は、平均の評価ポイントが3.0を下回る評価はなく、肯定的な回答の数値もいずれも高い評価を示している。その中でも比較的lowな項目は以下の2つであった。

⑱「あなたは、教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っていますか。」

昨年度 平均点 2.8

今年度 平均点 3.2

㉒「あなたは、働き方改革を意識して、積極的に業務改善に取り組んでいますか」

昨年度 平均点 3.0

今年度 平均点 3.1

#### 【考察】

⑱「地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っていますか」については、昨年度も比較的lowな評価であった項目であるが、昨年度より平均値が上がっている。今年度も、昨年度に引き続き地域人材を活用し教育活動を行っている。具体的には、いきいき教育人材を活用した合唱指導、地域住民や卒業生による職業講話、県内高校合唱部による芸術鑑賞教室など、地域の人材を講師としてご協力いただいている。特に、職業講話では、地域に根差した職業人から話を聞くことで、将来、南アルプス市で働くことを考えるきっかけになった。また、家庭科授業においては、毎年地域施設を利用させていただき、保育実習を実施している。今後、各学年、各教科の諸活動や授業において地域の教育力を積極的に活用していくことを職員に周知していく。

㉒「あなたは、働き方改革を意識して、積極的に業務改善に取り組んでいますか」については、昨年度より評価の平均点数およびA回答も上昇しているが、まだまだ改善していくべき課題と捉えている。管理職からの声かけと教職員の意識の高まりにより、毎月の時間外在校時間も徐々に減少しているものの、長時間勤務が常態化している状況も見受けられる。年々若手教員が増加している現状を踏まえ、業務量の偏りや内容の軽重を適切に判断し、必要に応じて相談・指導を通して改善を行っていく。今後は、今ある教育活動の意義を再確認しながら、必要性和効率性を見極めた取組となるよう教職員の意識改革と見える化を進めていく。これらの取り組みが教職員の心身の健康維持・管理につながり、子どもたちとの関わる時間が増えるような働き方の改革に努めていく。

## 生徒の評価アンケートについて

生徒アンケートでは、平均点数化できる19項目のうち、17項目で評価の平均が3.0を上回る結果であったが、昨年度よりわずかではあるが評価が下がった項目が17項目中9項目あった。特に、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目は以下の2つであった。

### ⑪「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている」

昨年度 平均点 2.8

今年度 平均点 2.9

### ⑬「わたしは、読書をしている」

昨年度 平均点 2.9

今年度 平均点 2.7

#### 【考察・改善策】

⑪「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている」の項目については、平均点数こそ高くはないが、A回答：「いつも伝えている」、B回答：「伝えている」と回答した生徒は、昨年度の63.1%から65.4%に増加し、D回答：「伝えていない」というマイナス回答は昨年度の10.1%から8.3%に減少している。今年度も、校内研究において昨年度まで取り組んできた指定研究「学びの質を高める授業づくり」を継続しつつ、積極的なICT活用と「学びあい」を取り入れた授業づくり、特に、授業の中では、「根拠をもとに自分の考えや思いを、自分の言葉で表現する」活動に重点を置き取り組んでいる。生徒の自己評価としてもなかなか向上が実感できない項目であるが、毎年わずかずつ向上がみられている。今後も小中一貫校の取組として行っているシンプルプログラム「くっしータイム」を継続しながら、他と関わる機会を積極的に取り入れた授業づくりを工夫していくことが大切である。

⑬「わたしは、読書をしている」の項目については、昨年度も評価の平均が低い項目であった。今年度は、A回答：「よく読んでいる」、B回答：「読んでいる」と回答した生徒は、昨年度の67.1%であったが、今年度は55.6%と減少した。教職員の89%が読書指導を積極的に行っているとの回答と、生徒の回答とではやや乖離が見られる。このような現状を踏まえ、毎日の10分間の朝読書は、落ち着いて読書をする貴重な機会ととらえ、教員も共に取り組んでいる。また、学校図書館では、読書活動の推進のため、生徒の声に応じて多くの新刊を購入したり、読書週間や教職員の図書紹介等の企画をしたりしながら学校全体で読書の啓発を行っている。授業での図書館利用も含め、今後も継続して本に触れる機会をつくっていく。

## 保護者の評価アンケートについて

保護者の回答については、全体的に肯定的な評価が高かったが、昨年度と比較して平均の評価ポイントが下がった項目が5項目あった。また、2.5を下回る評価項目が1つあり、以下の質問項目において考察を述べる。

### ⑨「学校は、保護者・地域住民からの声に耳を傾けていますか」

昨年度 平均点 2.3

今年度 平均点 2.3

#### 【考察・改善策】

これに関してアンケートの詳細を見ると、「とてもそう思う」「そう思う」を合わせた肯定的な回答の割合が69.4%であった。一方、否定的な回答の割合は、6.9%、「わからない」と回答した割合は23.7%という結果であった。学校では、⑧の項目「学校（学年・学級）だよりやホームページから教育活動の様子を知ることができるか」の質問に83.5%の肯定的な回答をしていることから分かるように、学校では、年度初めに家庭訪問、1、2学期末それぞれに三者懇談、学期ごとの学校開放及び授業参観、さらに学園祭等の行事の参観を設定しており、学校からの様々な情報を知ることができる状況にあるが、保護者からの意見や日頃感じている思い、疑問に思っていることなどを伝える機会がない、もしくはわからないといった状況があると推測される。この学校評価も保護者からの様々な声を聴く貴重な機会になっている。今後、さらに学校がより良い教育活動を推進していくためにも、また子どもたちの健全な成長を支えていくためにも、保護者からの理解および協力は不可欠である。ICTの活用や三者懇談等の情報共有の機会を大切にしながら、生徒・保護者・職員にとって有益な学校運営をしていく。